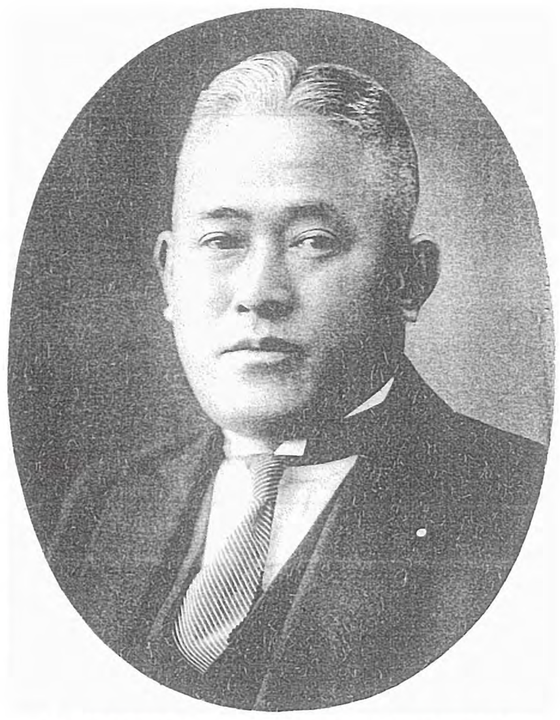
堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

“世界はわが市場なり”師の言葉を胸に　加藤勝太郎

一代で巨財をなした財界人


加藤勝太郎　（中京年鑑　昭和11年）

堀川・納屋橋を拠点にした加藤商会

堀川の納屋橋東北角に、瀟洒なビルが建っている。国の登録有形文化財の旧加藤商会ビルだ。納屋橋は東京日本橋や大阪心斎橋に負けない橋を架けようと、名古屋の誇りをかけて大正２年（1913）に改築された橋だ。旧加藤商会ビルは納屋橋竣工後に着工され、大正7年にレンガ造で建てられた。大正ロマンを濃厚にただよわせる納屋橋の景観にしっくりと調和している。

昭和６年（1931）加藤商会ビルは関東大震災級の地震にも耐えるように鉄筋コンクリート造で改築された。納屋橋も昭和 56 年に改修工事がなされている。だが、橋も旧加藤商会ビルも往時の姿を留める配慮が施された。

加藤商会は、納屋橋を拠点に貿易商として活躍した加藤勝太郎の創立した会社だ。勝太郎は開港されてまもない名古屋港と堀川の舟運を活用して多くの物資を輸出入し、一代で巨大な財をなした人物である。

名古屋商業学校の恩師の諭しで貿易商の道へ

市邨芳樹（市邨学園）

加藤勝太郎は明治 18 年（1885）中島郡大里村（現：稲沢市）に加藤周三郎の長男として生まれた。

明治 37 年、名古屋商業学校（CA）に学籍をおいたまま日露戦争に召集され、終戦で再び学校に戻った。そこで抱いた東京高商（現：一橋大学）への進学の思いを、父周三郎の中国向け柱時計の販売不振を見て口にするのをためらい、思い悩んで CA 校長室に市邨芳樹（日本初の女子商業教育校市邨学園の創設者）を訪ねた。

芳樹は教え子の話に熱心に耳を傾け、そして即座に「実地に即け」と言った。東京高商に進学して机上の経済学を学ぶより、実際に商業の何たるかを経験せよという教えである。

芳樹は常々生徒たちに「商士道」、商人は誇りを持って商売をせよと教えていた。「世界はわが市場なり」、世界に眼を開き、世界を相手として商売をせよと教えた。勝太郎の人生は、芳樹の教えにより大きく変わった。夢とロマンをもち、世界はわが市場なりを実践し、成功したのだ。

香港で貿易会社を創業

それからというもの、勝太郎は学校の休日には父と神戸に行き、商売相手の華商の店を回って歩き、相手にねばり強い交渉をする父親の姿を心に焼き付けた。そして明治 39 年、21 歳で貿易商を目指し単身香港に渡った。市邨は教え子の三井物産香港支店長太田静男に紹介の手紙を書き、勝太郎の力強い現地協力者としている。家業の柱時計輸出と石鹸輸入などを手がけ、苦労を重ね成功して帰国、加藤商会を設立した。本社の立地は堀川の舟運で名古屋港に直結し、市内各所に交通機関が張り巡らされている納屋橋が選ばれた。

貿易商は戦時統制経済下に店を閉じ、昭和 20 年から４年間、請われて市邨学園の２代目学園長を務めている。加藤商会本社建物は戦火をくぐり抜け、中埜産業名古屋支店を経て名古屋市に寄付され、修復されて堀川ギャラリーやタイ料理店が入り現在も活用されている。

シャム国（タイ王国）名誉領事となりビルも領事館

大正７年の米騒動の時、８月 12 日鶴舞公園に集まった群衆は３万人といわれる。暴徒と化したデモ隊は大池町の交番を襲い南伏見町の米屋を襲った。13、14 日も公園に集まった群衆は、市内各所で米屋を襲った。当時の松井県知事、佐藤名古屋市長の要請をうけて、勝太郎は傭船から外米３万俵を引き下し、１斗ずつの袋につめ込み、各区役所の玄関前に、積み上げた。その米俵を見て、人々は安堵の声をあげた。勝太郎による外米３万俵により、米騒動は鎮静化した。タイ米輸入で危機を乗り越え、その後外米の取扱いではこの地方随一の商社になった。

昭和 10 年には名古屋駐在シャム国（タイ王国）名誉領事に任命され、加藤商会ビルはシャム国領事館になる。

昭和 22 年、名古屋貿易会初代会長に就任後、日本貿易会会長の要職につく。東郊住宅や名古屋ゴルフ倶楽部などの取締役も兼務し、名古屋財界で重要な地位を占めたが、昭和 28 年（1953）に 68 歳で没した。

加藤商会ビル夕景